



ヒットメーカー

10月7日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月7日のおはなし「ヒットメーカー」

「社長」戸口のところで声がした。「社長！」
「ん？ あ！」まだその呼ばれ方に慣れていないのでなかなか反応できない。「何？」
「キマイラドリンクの社長がお見えです」
「え？ キマイラの？ 柏社長が？」社長が直々来るとは何ごとだろう。アポイントもなしに。何か問題でもあったのだろうか。「なに。どんな様子？」
「どんな……様子、ですか？」聞いてから、先週アシスタントで入ったばかりの子に、そんな微妙なニュアンスを聞いてもわかるわけがないことに気づく。「ああ、いや、いいんだ。すぐ行く。会議室にお通しして」

この数年、キマイラドリンクのキャンペーンを一手に引き受けるようになって、あわてて構えた事務所が年々拡張して、以前はデザイナーの仲間と2人で小さなマンションの1室を借りてのんびり細々とやっていたのが、いまや社員は20人に増え、とうとう会議室まで持つようになった。人はサクセスストーリーと言うが、とてもとても。内情はそんなものではない。

「柏社長、これはどうも。わざわざお越しいただいて」
「いやいや、お忙しいところすみませんな。長居はしませんから」
「まあ、そう、おっしゃらず」よかった。特に怒っていると緊急の問題とかいうことではなさそう。しかし社長直々お出ましと言うことは何か大きなお話でしょうか？
「大きな話？」キマイラドリンクの社長が一瞬遠くを見る目つきになって、またおれを見る。「大きいと言えなくもないが、どちらかという雑談です」

はあ？ 雑談？ こっちはおたくの次のキャンペーンのプレゼンで追いまくられているのに？

「雑談、いっすねえ」自分でも呆れてしまうのだが、おれはこういう心にもないことを言うようになってしまった。「仕事とは関係なく？」

その時アシスタントがノックをして、お盆にキマイラのペットボトルとグラスを乗せて入ってきた。すると柏社長は思いがけない早さで言った。

「ああそれはいいですね。ちょっと飲み過ぎなのでね。普通に入れたお茶があればお願いします」

きょとんとしているアシスタントに、あわてておれがフォローする。

「熱いお茶、入れてきて。水野におれがそう言ってたって言えばわかるから」

熱いお茶を一口すすって柏社長が言う。

「先日ね、聞いてしまったんですよ」

「は」

「部下に連れられましてね、おいしいカクテルを飲ませる変わった店があるからって」

「は」イヤな予感がした。「へえ、いいですねえ」

「火星の石を飾ってる」

「ああ。MARS STONE」予感的中。「わたしも時々いきます」

「はい」柏社長は微妙な表情でおれを見つめた。「その時、いらっしゃいました」

「え？」すごくイヤな予感。「い、いつ？ 声をかけてくださればよかったのに」

「ちょうどマスター相手にすごく話しておられたので」

まずいよまずいよ。うわあ。まずいよ。それはまずいよ。

「そもそもあのプレゼンは通すつもりがなかったって」

あいたたたー！ 新しいカクテル「王様の耳」を飲んだときだ。キマイラドリンクの製品のネーミングの裏話を洗いざらいしゃべったのを聞かれてしまったんだ！

そもそもあのプレゼンは落ちるためにやったプレゼンだった。あの時おれたちはもう、この会社を、というかこの仕事自体を辞めようと思っていたんだ。だから普段なら出さないような、めちゃくちゃなネーミングをたった1案だけ持っていった。ロゴもデザイン以前のラフ段階のもの

を用意し、ごく普通の書体を使って「水」の肩に二乗の「2」をつけて、ビタミンCの「C」で〈水2C〉というだけの色気も何もないものだった。それは落ちるためのプレゼンだったのだ。柏社長だって最初は「すいつーしー？」なんて読んだ。それでよかったんだ。読めやしないということと落ちることとくれればよかったんだ。正解は「みずみずしい」というのがその読み方だったんだが。

「ええとつまりそれは〈水2C〉のプレゼンの話で」
「全部聞きました。辞めるおつもりだったんですね」
「はあ」聞かれたんなら仕方がない。「あの時は。でも採用していただいたおかげで、あんな大ヒット商品にかかわらせていただいて……」

そう。採用されたのも驚きだったが、〈水2C〉が大ヒット商品になってしまったのはもっと驚きだった。確かに機能もよかったし味もよかったが、ヒットするほどの個性はなかった。ましてや「みずみずしい」というネーミングで大ヒットするとは全く予想していなかった。あれ以来おれの肩書きは「みずみずしい感性のコピーライター」とか何とか、もう顔から火が出そうなことになっている。才能もセンスも枯れきったからこそやめようと思ってプレゼンしたのに、みずみずしい、だなんて。

「わたしも驚きでしたよ」キマイラドリンクの社長が言う。「『輝く笑顔に〈水2C〉』『一口飲んだら〈水2C〉』『乾期が来ても〈水2C〉』……。どのキャンペーンも大当たりでした。あなたのおかげです。」

「いやいや。製品がいいんですよ」
「しかし今日はそういう褒め合いをしにきたわけではありません」来た。来たぞ。やっぱりクレームだ。クレームなんだ。「わたしもね、同じなんです」
「え？」クレームではないらしい。「同じ、とは？」
「〈水2C〉を採用した時にはね、こけるつもりだったんです」
「へっ？」
「もう会社をやめるつもりだったんです。同じなんですよ」

呆気にとられてあいづちをうちそこなった。キマイラドリンクの社長は特に気にもせず、淡々と続けた。

「それでね。ひとつお願いがあるんです」
「はい」口封じだろうか。ああいうことを外でべらべらしゃべるなとか。「何でしょう」
「次の新製品なんですがね」
「は、はい」
「やっぱり終わりにしたいんです」
「はい？」
「だからあなたも狙わないでいただきたい。〈水2C〉の線も狙わず、ヒット商品も狙わず、落ちそうなネーミングも狙わず」
「むずかしいですね」
「むずかしいです。けれど会社をやめる覚悟を持って、通りそうもないネーミングをたったひとつ持ってきてください。ひどければ採用します」
「本気ですか」
「本気です。これが最後の新製品です」

少し間があって、おれたちは同時に笑った。みずみずしい。うん。おれはともかく、この親父はみずみずしい感覚を持っているよ。

(「みずみずしい」 ordered by オネエ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブックログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひよっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験

済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上げてまいりましょう。

ヒットメーカー

<http://p.booklog.jp/book/35041>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35041>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35041>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.